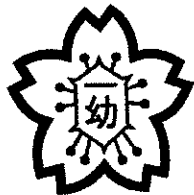
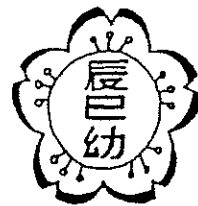
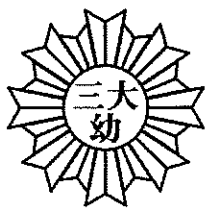
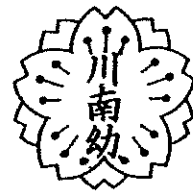
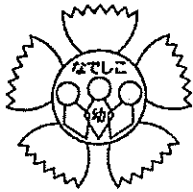
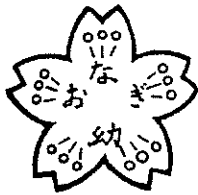
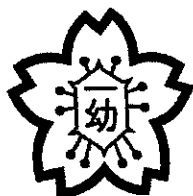
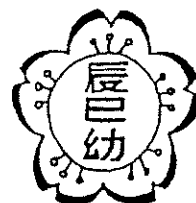
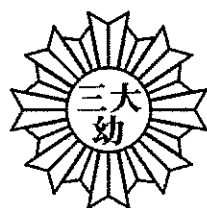
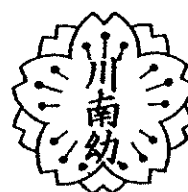
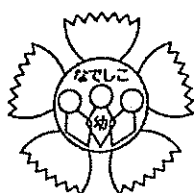
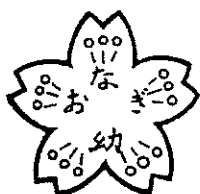


# 研究集録・40周年記念誌



江東区立幼稚園教育研究会

# 研究集録・40周年記念誌



江東区立幼稚園教育研究会

# 目 次

江東区立幼稚園教育研究会会長挨拶	1
江 東 区 長 挨 拶	
江東区教育委員会教育委員長挨拶	2
江東区教育委員会教育長挨拶	
江東区教育委員会学校教育部長挨拶	
江東区立幼稚園園長会会長挨拶	3
江東区小学校教育研究会会長挨拶	
江東区中学校教育研究会会長挨拶	
平成 18・19 年度研究集録	4
Ⅰ 研究報告	4
第一部会 経験したこと、感じたこと、考えたことを豊かに表現する幼児を育てる	5
第二部会 身近な自然とのかかわりを通して、 幼児の豊かな心を培うための環境の工夫と援助	12
第三部会 人とかかわる力が育つ過程を明らかにする ～幼児の育ちを支える教師の援助のあり方を中心に～	19
第四部会 幼児期からの学び ～指導の工夫と発信～	26
Ⅱ 研修内容 実技研修 講演会	33
部員名簿	36
創立 40 周年を迎えて	38
江東区立幼稚園 園数、園児数、会員数の推移	39
江東区立幼稚園教育研究会のあゆみ	40
20 園の紹介	48
40 周年記念事業実行委員会組織	53

# 平成 18 年度・19 年度 研究集録

## I 研究報告

### 研究主題

## 質の高いこれからの幼児教育を目指して

### 《研究主題のとらえ方》

近年、都市化や少子高齢化の進展などにより、教育を取り巻く環境は大きく変わり、子どもの育ちにも様々な影響がみられます。こうした状況の改善に向け、教育改革が行われました。

新しい教育基本法・学校教育法では、幼稚園が学校として位置づけられ、幼児教育が生涯に渡る人間形成の基礎を培う重要な教育であるということが明文化されました。

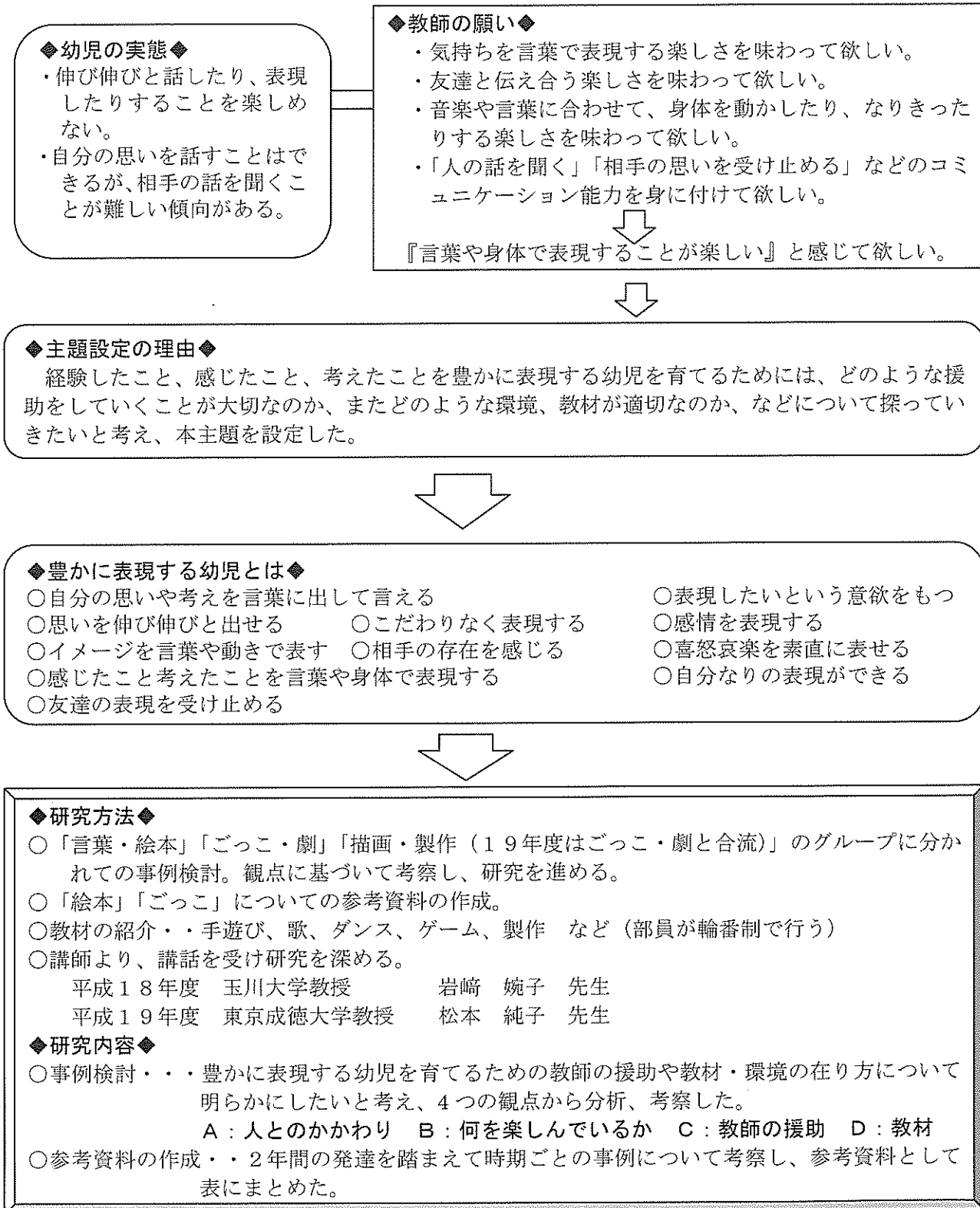
このような中で、今まで江東区立幼稚園が培ってきた教育内容の質の高さを明確にし、江東区の幼児教育を新たに見つめ直し、さらに研究を深めていく必要があると考えました。そこで、豊かな教育環境を形成し、次代を担う子どもたちの健やかな心身の成長を促すため、教師の指導力と資質向上に視点をあてて研究することにしました。教師の専門性や人間性を磨き、教師一人一人が指導力を高め幼児教育を一層充実させることが、江東区立幼稚園教育研究会の課題であると考え、本テーマを設定しました。

このテーマに基づき、4部会を設定し、研究を進めてきました。

- |      |   |
|------|---|
| 第一部会 | 経験したこと、感じたこと、考えたことを<br>豊かに表現する幼児を育てる            |
| 第二部会 | 身近な自然とのかかわりを通して、<br>幼児の豊かな心を培うための環境の工夫と援助       |
| 第三部会 | 人とかかわる力が育つ過程を明らかにする<br>～幼児の育ちを支える教師の援助のあり方を中心に～ |
| 第四部会 | 幼児期からの学び ～指導の工夫と発信～                             |

経験したこと、感じたこと、考えたことを豊かに表現する幼児を育てる

I 研究の構造図



II 研究内容

事例1 「仲間と一緒に動くことを楽しんだ事例」

2年保育 4歳児 男児15名 女児11名 計26名

○時期は11月初旬。10月下旬から中型積み木で基地を作って一緒に遊んでいる幼児が、「ボウケンジャー」になりきり動くことを楽しむようになる。身に付ける物を作ったり一緒に動いたりする援助をすることで、徐々にイメージが共通になり、なりきったり、友達に見てもらったりすることを楽しむようになっていった。約1週間続いた遊びである。

<週のねらい> 友達とかかわることを楽しみながら自分の思いを言葉や態度で表そうとする。

C 幼児の姿と教師（T）の援助	A 人とかかわり	B 何を楽しんでいるか	D 教材
<p>①A児B児C児が変身ベルトを身に付け基地を作り、なりきって動く。</p> <p>②近くで遊んでいる幼児がチケットを配っている姿を見て、刺激を受けボウケンジャーのチケットを作る。(T) 客として見に行く。</p> <p>③基地の中で戦うふりをして楽しんでいる。本人たちはショーのつもりである。</p> <p>④翌日BGMをかけながら場を作る。場ができると、昨日作った武器を使って戦ったり、走り回ったりする。(T) 体を動かせる場を作れるように巧技台を提案する。</p> <p>⑤巧技台からジャンプをしたり、上でポーズを決めたりしてなりきっている。</p> <p>⑥しばらくするとC児が、「ショーを始めます」と宣伝する。しかし「でも敵がいよいよ。どうする？」と言う。</p> <p>⑦(T) 敵をどうするかを共に話し合う。「作った敵だと動かないよ」というD児。(T) 4人が戦う動きより、ポーズやジャンプの動きを楽しんでいたのを、<u>透明の敵に教師が捕らわれてしまうのを助けることを提案する</u>、仕切りを持って来て牢屋に見立てる。</p> <p>⑧宣伝をし、お客が来ると、ショーが始まる。(T) 敵に捕まる役をすと、「今から助けにいくぞ!」と一致団結。その雰囲気は気づき、客が増える。BGMを流しながら、4人で「ここでこのポーズね」「最後のところで敵を倒そう」など動きを決めたり動きを合わせたりする。</p> <p>⑨たくさんの幼児が見に来たことで満足する。何度か繰り返し楽しむ。</p>	<p>①8人で「ここに積み木を置いて」など言い合いながら場を作る。</p> <p>②他の幼児の遊びに興味をもち、チケット作りを遊びに取り入れる。</p> <p>③見に来てくれた人を意識して動く。</p> <p>⑦4人で話し合うが、なかなか方向性が定まらない。(T) も加わり、どうしていくかが決まっていく。</p> <p>⑧誘った友達が見に来てくれることが嬉しい。4人でイメージを共にしながら動く。</p>	<p>①一緒に場を作ること、なりきることを楽しむ。</p> <p>②新たな目的ができ、チケットを作り、お客を呼ぶことが楽しい。お客がいることが嬉しい。</p> <p>③ショーをしているつもりになっていることや見てもらうことが楽しい。</p> <p>④BGMを聴きながら場を作り、気持ちが高まっていく。昨日使った武器を持ってなりきったり体を動かしたりすることが楽しい。</p> <p>⑤高いところからジャンプをするなどいろいろな動きをすることが楽しい。</p> <p>⑦どのようにショーにしていくか決まっていくことが楽しい。ショーの準備を楽しむ。(牢屋作り・客席作り)</p> <p>⑧なりきって一緒に動くことが楽しい。お客に見てもらうことが楽しい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由に使える紙（端切れ）</li> <li>・なりきるためのBGM（ボウケンジャーのボーカル無し）のテープ</li> <li>・雑材（トイレットペーパー・箱・プラスチック容器・新聞紙等）</li> <li>・巧技台</li> <li>・ごっこ遊びで使う牛乳パック製の仕切り</li> </ul>

<考察>

【遊びを楽しんだ要因】

- ・気が合う仲間だったので共通のイメージがもちやすかった。また、思いを言い合える関係であった。
- ・身に付ける物を作ったり、BGMをかけたりすることでよりイメージが共通になりやすかった。
- ・教師が互いのイメージを仲介したり、一緒に動いたりすることがイメージの共通化につながった。
- ・周囲の幼児がしていたチケット作り刺激を受けて取り入れたことで、友達が来てくれて遊びが楽しくなった。

事例2 「気の合う友達とイメージを出し合い、遊びを進めた事例」

2年保育 5歳児 男児9名 女児8名 計17名

○時期は6月下旬。5月の誕生会出し物で、教師のパペットの劇を見た。6月の壁面装飾の1つとして、かえるのパペットを作る経験をした。女児4名が、かえるのパペットを使って、人形劇遊びを始める。

<週のねらい> 友達の動きや言葉を受け止めようとし、同じイメージの中で遊ぶことを楽しむ。

C 幼児の姿と教師(T)の援助	A 人とのかかわり	B 何を楽しんでいるか	D 教材
<p>6月27日</p> <p>①E子、F子、壁面装飾のかえるのパペットで「人形劇をしたい」と、(T)と一緒に積み木を運び舞台を作る。G子、H子が仲間に入る。</p> <p>②4人でパペットを持ち「森に来ました」「こんにちは」と言葉を交わす。</p> <p>③しばらく同じやりとりだけが続く。</p> <p>④(T)「かえる君たち、これからどうするの?」「どういうお話にしたいの?」と聞くと、「チケットに行きたい」「他の動物もいた方がいい」「歌を歌いたいね」と、少しずつやりたいことを(T)に言う。</p> <p>⑤(T)「他の動物の作り方を教える」と、G子、H子が、うさぎ、きつねを作る。</p> <p>⑥(T)「舞台に黒の大きな布をかける」と、「草をはやそう」「家を作ろう」と、よりイメージが膨らみ、製作コーナーに行き、4人で素材を選んで、草と家を作る。</p> <p>6月28日</p> <p>⑦年少児などお客が集まってくる。</p> <p>⑧人形劇を演じながら4人で相談しストーリーを考えていく。「動物たちが森にどこか行って歌うってことは?」「さんぽの歌がいいんじゃない?」「いいね」</p> <p>⑨チケットを配ったり、自己紹介等したりして、人形劇を楽しむ。</p> <p>6月29日</p> <p>⑩男児2名「入れて」と言う。(T)「入れてあげたら?」と、仲間に入れることをすすめる。E子「いいよ」と、新たに仲間を加えるが、男児がふざけたり、ストーリーが伝わらなかつたりして、何度も遊びが中断する。</p> <p>⑪女児4人は、人形劇をやめてしまう。</p>	<p>①気の合う友達と同じ遊びをしようと協力して場を作る。</p> <p>②パペットを通し簡単な言葉のやりとりを繰り返す。</p> <p>④(T)に自分の思いや考えを伝えながら、他の幼児の思いに気付いていく。</p> <p>⑧お客に観てもらおう意識、意欲があるので、自分の思いを積極的に出し、仲間の意見も素直に受け止めることができていく。</p> <p>⑩男児を仲間に入れたが、イメージが伝わらない。</p>	<p>②見慣れない人形劇の舞台が嬉しい。</p> <p>④(T)に問いかけられたことで、イメージが少しずつ具体的になってきた。</p> <p>⑤少しの工夫で別の動物を自分たちで作ることができて嬉しい。</p> <p>⑥自分たちのイメージに向かって必要な物を作っていくことが楽しい。</p> <p>⑦お客が来て嬉しい。</p> <p>⑧気の合う仲間と、互いの思いやイメージを出し合うことを楽しんでいる。</p>	<p>○全員が持っているかえるのパペット</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;"> <p>パペットのカット</p> </div> <p>○友達と遊ぶ大型積み木</p> <p>○かえるのパペットを応用した他の動物(少し変えて自分たちで作ることができる)</p> <p>○より舞台らしくなる大きい布</p> <p>○自分たちで選んで扱える素材(色ダンボール、画用紙)</p> <p>○人形劇を盛り上げる効果音として、自分たちで扱えるさんぽの歌のカセット、鈴、カスタネット、タンバリン</p>

<考察>

【遊びを楽しんだ要因】

- ・気の合う友達同士だったので、自分のイメージや考えを安心して積極的に出すことができた。
- ・製作の得意な幼児たちだったので、少し難しく工夫が必要な教材であるパペットや舞台の家や草作りは、遊びの意欲につながった。
- ・年少児のお客に見せるということで、ストーリーを意識し、友達と思いを出し合ってイメージを膨らませていくことができた。

【遊びが終わってしまった要因】

- ・遊びを作り上げるところから参加していなかった男児を、教師が仲間として入れることを認めてしまったため、元から遊んでいた4人とはイメージが合わず、遊びがつまらなくなってしまった。後から参加してきた幼児たちには、新たに別の場を作るべきだった。

【わかったこと】

幼児は、自分なりの表現が受け止められることで安心感をもち、伸び伸びと表現することができる。ごっこ遊びを通して発達の過程や教材の活用法・教師の援助などを、具体的な事例をもとに検討し、各学年で大切にすべきことが明らかになった。

<4歳児>

- ・自分の思ったことや考えたことを安心して出せるような教師との信頼関係や、学級の雰囲気や学級の雰囲気が大事である。また、「教師のしていることを真似してみたい」「友達が持っている遊具を自分も使いたい」という思いを一人一人が実現できるように、場を整理したり十分な素材・教材などを用意したりすることが必要である。
- ・なりきって動くことや何かに見立てて作ったり遊んだりすること、幼児の中から出てきたイメージなど全てを表現として受け止める教師の姿勢が大事である。
- ・教師も仲間の一員となり、遊びに必要な言葉を知らせたり遊びの楽しさに共感したりして、援助をすることが大切である。また、それぞれのしていることが友達に伝わるように、教師と一緒に動いたり言葉に出したりすることで、更に友達と遊ぶことの楽しさにつながる。
- ・いろいろな素材・基礎的な技術を知り、ためこむ時期なので、様々な方法を教師が提示したり気付かせたりしていく。幼児から出たイメージやアイデアを実現できるように、新しい素材や作り方を知らせたり幼児と一緒に考えたりしていくことも重要である。

<5歳児>

- ・年長になると、友達の存在が大きく影響し、友達から刺激を受けながら自分たちで遊びや生活を進めていくようになる。そこで、友達と互いの思いを出し合い、一緒に実現していけるような仲間づくりをする。そのために友達の良さに気づき、互いに認め合えるような場面や機会をつくり、仲間意識を高めていくことが大切である。
- ・友達関係の深まりを意識した上で、教師がその時期に応じたねらいを明確にもち、イメージの共通化を図ることが大切である。また、教師は互いに認め合えるように援助したり必要な場面でヒントを出したりするなどして、自分たちで取り組んでいく満足感や充実感が味わえるようにしていく。
- ・年少時に「いろいろな素材に触れる」「思いを十分に出したり実現したりする」などを積み重ねることが、年長になってから自分でイメージに合ったものを選択したり表現したりする力につながると考える。そこで、今までの経験の上に新たな素材や活用方法を知らせ、試したり工夫したりして本物らしくすることでの満足感を味わう援助が大切である。

事例3 「同じ絵本を見ることで教師や友達を身近に感じた事例 4月～5月末」

2年保育 4歳児 男児13名 女児13名 計26名

幼児の実態

絵本に対する興味や関心には個人差が見られる。



この時期の教師のねがい

- ・教師に親しみを持ち、教師の読む絵本に期待感をもって、見ることを楽しんでほしい。
- ・クラスの友達と集まって一緒に活動するひとときを「楽しい」と感じてほしい。
- ・声を出すことや友達と触れ合うことで、開放感や一体感を味わってほしい。



絵本「おばけがぞろぞろ / ささきまき」を選んだ意図：教材D

- ・「おばけ」という言葉は幼児にとって興味をひくものではないか。
- ・絵本に出てくる「おばけ」の名前の面白さを感じてほしい。
- ・「いえい！」というところでは、声を出すことで、友達との一体感や開放感を味わってほしい。
- ・「おばけ」という言葉にドキドキしてしまう幼児には「隣の友達と手をギュッとするといいよ」と伝え、友達に触れる機会にしたいと考えた。

絵本を読んだ時の状況 ※下線部 楽しんでいたところ：B

「おばけの本をもってきたのだけれど、読んでも大丈夫かな」と(T)が言うと、「こわくないよ」「大丈夫」などという声がある。「でもね、怖くなっちゃった時は、お隣の友達と手をギュッとすると大丈夫だよ」と声をかける。「おばけ」という言葉にドキドキしつつも、見てみたいという気持ちが感じられた。ページを読み進めていくうちに、「おばけ」が出てくるところを予測し始め、「もう一回読んで」と繰り返し見せることを要求してくる。繰り返し見せることで、近くの幼児と「ゴミ箱の中から出てくるんだよね」「にゅーうってででくるんだよね」などと「おばけ」が出てくるところをヒソヒソ話す姿も見られた。また、21、22ページの「いえい！」というところでは、みんなで手を挙げ声を出すことを楽しんでいた。

<後日>

絵本棚から手にとる幼児がいたり2、3人で車座になってページをめくっている様子が見られたりした。そして、友達と一緒に声を出し、「いえい！」と手を挙げて見ている姿があった。また、(T)に「鼻の中から出てくるんだよね」と絵本の内容を話に来る幼児もいた。

保護者からも家庭でこの絵本のことが話題になっていたことを聞く。

教師(T)の援助：C

- ・「おばけ」という言葉で興味をもてるようにし、絵本を見る楽しさを感じられるようにする。
- ・友達と触れあえる機会になるよう、「お隣の友達と手をギュッとすると大丈夫だよ」と声をかける。
- ・繰り返し学級の友達と見る機会を取り入れたり、幼児が手にとりやすい環境を準備したりする。
- ・アイコンタクトで、一緒に呼吸を合わせて声を出し、参加できるようなページもつくる。

<考察>

- ・この絵本では「おばけ」という言葉が、幼児の興味をひく「言葉」であることがわかった。また、幼児の心に響く言葉やタイミングがあることが分かった。
- ・教師が、繰り返し絵本に出会わせることで、相手と目で合図したり、呼吸を合わせたりしながら、一緒にタイミングが合っていくことを体感できたと思われる。
- ・後日、絵本棚に置くことで、好きな時に繰り返し自分で手にとって絵本を見ることができた。そのことが、絵本に対する親しみや数人の友達と一緒に見る楽しさにもつながったと思われる。
- ・学級の友達と一緒に絵本を見る中で、思わず声が出たり体が動いてしまったりすることも楽しい、という雰囲気や安心感をもてるようにすることが、今後の学級の雰囲気や表現活動のきっかけにもつながるとと思われる。

事例4 「絵本と体操の曲の歌詞から、探検ごっこを楽しんだ事例」

2年保育 5歳児 男児15名 女児11名 計26名

○ 時期は4月中旬から5月下旬。男児3名が「めざせ たからじま」の曲をかけて踊っていた。「馬に乗って行こう」の部分で「馬…」と言い顔を見合わせている。(T)の「本当に馬に乗れたらいいね」の言葉から、馬を作り曲に合わせて動くことを楽しみ始めた。同時に数日かけて「たんたのたんけん」を読んだ。絵本に掲載してある地図はあえて提示せず、話の内容に合わせて見せるようにした。すると他児も、地図を描いて園庭を探検したり、お話のイメージを園庭の場所に重ね合わせたりする姿が見られた。望遠鏡も作り出した。

馬を作った男児らは、望遠鏡、地図、武器（途中で敵に会うかもしれないから）を作るが、小道具を全部持つと馬に乗れない。(T)の「どうしたらいいかな」の言葉から「リュックに いっぱい たべものつめて」の歌詞を思い出し、リュックと食べ物を作り出す。

「めざせたからじま」と「たんたのたんけん」のそれぞれのイメージで遊んでいた幼児が、互いのイメージを合わせて「にじ組探検隊」の話を作り、誕生会で見せた。

D 教材	① 体操の曲「めざせ たからじま」 教材を選んだ理由：探検の雰囲気楽しく踊り探検ごっこのイメージを広げたいと考えた。	② 絵本「たんたのたんけん」 教材を選んだ理由：探検のイメージを更に広げたいと考えた。
A 人との かかわ り	・曲や歌詞に合わせて動き、楽しさを共有する。 ・自分のイメージや作りたいものを伝え合って一緒に作る。 ・「おもしろそう」「やってみよう」と興味をもって見ている。 ・幼児の発想を受け止め、さらに楽しくなるような援助をする。 ・幼児の発想や楽しさに共感する。	・作り終えた幼児が、作り方を教える。 ・作ったものの自分なりの工夫点を友達と知らせ合う。 ・どこをどんな風に探検したのか楽しかったことを(T)に報告する。(楽しさを受け止め聞いてくれる(T))
B 何を楽 しんで いるか	・曲や歌詞を楽しんでいる。 ・歌詞から探検のイメージを膨らませる。 ・必要なものを作る。 ・作ったものを使い、曲に合わせて友達と一緒に動く。 ・曲中の「ちびっこ探検隊」になりきって動く。	・ハラハラドキドキするお話。 ・話から「探検」「探検に持っていくもの」を考える。 ・必要なものを作る。 ・作ったものを身に付け、友達と一緒に園内を探検する。 ・登場人物になりきって動く。
C 教師(T) の援助	・体操の曲から表現遊びをする幼児の楽しい発想を受け止める。 ・「つもり」ではなく、遊びに必要なものに気付き、作れるような援助。 ・それらしく作れるような作り方や材料の提示。作り方や素材の経験を積み重ねられるようにする。(馬、食べ物、リュック) ・幼児同士教え合って作れるように、教師は見守る。	・情景が浮かぶようにお話を語る。 ・話から刺激を受けて「必要なものを作る幼児」「話に出てくる場所を実際の場所に置き換えて考える幼児」の姿を皆に紹介する。
	・幼児の考えやイメージを受け止め、実現できるようにストーリーや材料・作り方を一緒に考えたり、提案したりする。 ・皆に見せた後は、感想を話し合う機会をもち、見ていた人が楽しんでくれた喜び・満足感を味わえるようにする。	

<考察>

- ・体操の曲でも、そのまま踊るだけではなく、歌詞(言葉)からのイメージで探検ごっこが生まれ、楽しむことができる。
- ・幼児の発想に教師が共感して援助したことで、幼児は表現することを楽しみ、学級全体も友達の様々な表現を受け止める雰囲気がつくり上げられ、楽しい表現が生まれた。
- ・年長児になると、絵本やことばの楽しさを感じるだけに留まらず、必要なものを作ったり動いたりして、遊びの中に取り入れて楽しむようになる。また、そうなるように援助することで伸び伸びと豊かに表現する楽しさや自信につながっていくと思われる。



## 【わかったこと】

絵本やお話は、家庭でも親しまれているものである。しかし、幼稚園においての活動では、「その場に共感できる友達がたくさんいること」「集団生活の中での幼児の成長を願う教師がいること」で絵本やお話が幼児の経験を深め、一人一人の心を豊かにする。言葉・絵本グループでの事例の検討や幼児の発達の筋道に照らし合わせた参考資料の作成を通して、次のようなことが分かった。

- ・同じ絵本やお話を友達と一緒に見たり聞いたりすることで、互いに共感したり、イメージを共有したりすることができる。その共通体験をもとに、イメージを再現したり、友達との一体感を味わったりすることができる。
- ・幼児の発達の道筋をとらえて、教材を選んだり、表現する環境を整えたりすることにより、幼児の感性を育み、幼児が遊びや生活の中で、友達と一緒に豊かに表現することができる。
- ・幼児の実態や発達の特性、興味に合った絵本を選び、同じ絵本でも繰り返し読んだり、教師の意図やねらいによって、別の時期にまた読んだりすることがある。そのことが、言葉を知ったり、絵本に対する興味が広がっていったりするためにとても有効である。また、繰り返し読める環境の確保も大切である。
- ・絵本を通して、疑似体験をしたり、実体験と重ねたりして、イメージを豊かにすることができる。また、科学絵本やことば遊び等を通して、語彙や知識を増やし、知的好奇心を育み、イメージを豊かに表現する上での言語表現の広がりにつながっていく。
- ・一人一人が自分の思いを表したり、イメージを豊かに表現したりできる学級の雰囲気づくりや教師が自ら表現を楽しむ姿を見せることが大切である。

## Ⅲ まとめと今後の課題

本部会では、「ごっこ遊び」と「言葉・絵本」の二つのグループに分かれて、日々の実践を持ち寄り、発達の道筋に照らし合わせて話し合い次のことが分かった。

- 発達のどの時期においても、指導する上で幼児理解が基本である。
  - ・幼児が何に心を動かし、何を楽しんでいるかなど、一人一人の思いをよみとる。
  - ・幼児の表現するための基礎的な素材や道具の扱い、使い方をとらえる。
- 発達の特性をふまえてねらいをもち、繰り返し楽しめる環境を構成する。
  - ・絵本や表現遊びを、繰り返し楽しめるよう、物的な環境や十分な時間の確保が大切である。
- 教師は、教材の開発や表現方法を積極的に学び、指導を工夫する。
- 教師は幼児との信頼関係を築き、幼児同士が互いのよさを認め合う温かい学級の雰囲気をつくることが大切である。
- 教師は幼児のモデルである。
  - ・教師は表現者であり、教師の言動が幼児の遊びを大きく左右する。教師は様々な表現のモデルであるということを常に意識することが大切である。

今後は実践を通して、更に幼児に豊かな感性と表現する意欲を育み、感情や体験を自分なりに表現する楽しさを感じられるようにしていきたい。

## 第2部会

# 身近な自然とのかかわりを通して、 幼児の豊かな心を培うための環境の工夫と援助

## 1. 主題設定の理由

幼児は、身近な自然との触れ合いの中で、生命や自然現象の不思議、神秘、美しさ、大切さ等を感じ、知的好奇心を深めたり、感性や人間性を育んだりしていく。そのためには、幼児自らが自然環境に働きかけ、感じたり発見したり考えたり試したりなど、直接体験を通して様々なことを学んでいくことが大切である。しかし、自然環境の減少や家庭の生活スタイルの変化等、様々な事情により、幼児が自然と触れ合う機会が少なくなっている現状がある。

このような状況から、幼児にとって幼稚園での豊かな自然体験が、重要な役割を果たす。そこで、教師は、意図的・計画的に環境を整えたり幼児の興味・関心を深めるような援助を行ったりすることが大切となる。また、偶発的な自然現象や幼児の行動にも対応して臨機応変に援助を行うことも必要である。そのためには幼児に適した自然体験や教材、自然物を使った遊び、援助の方法、自然体験を通じた幼児の育ち等について、教師が理解を深めていくことが不可欠である。

そこで、幼児が身近な自然とのかかわりの中で自然への興味・関心を深め、豊かな心を培っていくための環境と援助のあり方について探り、保育に生かしていきたいと考え、本主題を設定した。

## 2. 研究経過

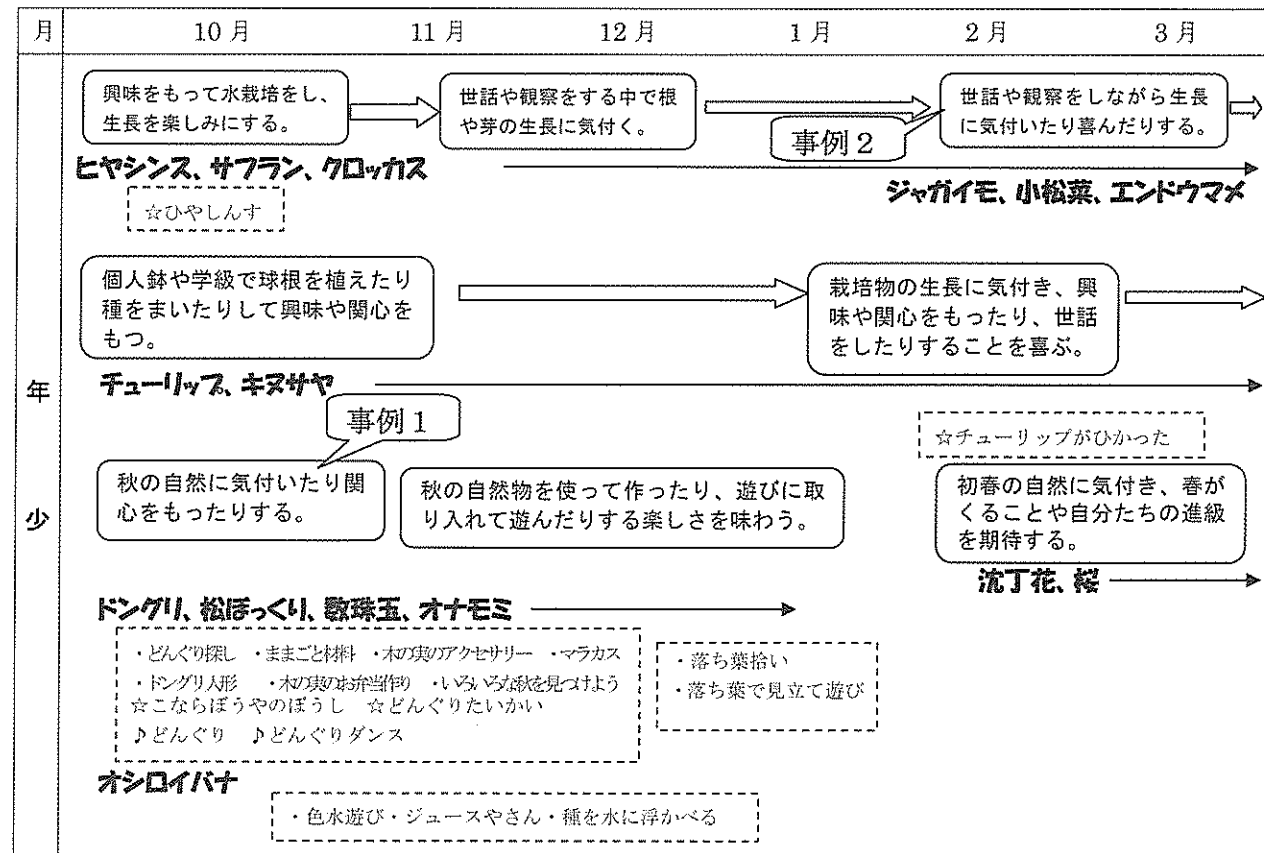
- 研究の目的、方法等について話し合う。
- 毎月、幼児が自然とのかかわっている事例（エピソード）を持ち寄り、グループに分かれて検討する。
  - ・今の時期に大切なこと（自然環境の面、幼児の発達の両面から）
  - ・教師の援助、環境の工夫
  - ・教材の情報交換
- 園庭の環境見学（1年次5月、7月、11月、12月）
  - ひばり、平久、南陽、第三大島幼稚園の園庭の自然環境の工夫などについて見学する。
- 講師の指導
  - （1年次7月）幼児と自然の会、元大田区立千鳥幼稚園長 福島恭子先生
    - ・幼児にとっての自然
    - ・幼児が豊かな自然体験をするための教師の役割
  - （2年次6月）東京家政大学 佐伯一弥先生
    - ・研究の進め方について

## 3. 研究内容

身近な自然とのかかわりを通して幼児の豊かな心を培っていくための環境と援助のあり方を、事例検討を通して探っていった。様々な事例の中で、大きく分類すると、「自然現象」「植物」「生き物」の3つに分けられると考えた。そこで3つのグループに分かれ、それぞれのグループで事例を再検討し、時期を逃さない自然体験ができるように、1年間の流れを表にまとめた。







植物カレンダーより一部抜粋 (別紙参照)

〈事例1〉絵本をきっかけにドングリに興味をもった事例・・・2年保育4歳児10月

登園時にドングリを拾ってくる子が増えてきたある日、帽子付きのドングリを拾ってきた幼児がいた。そこで、絵本『こならぼうやのぼうし』を学級で読んだ。ドングリが付いていない帽子の部分を目指し「どこかで帽子を探しているかもね。もしかしたら前にお友達が拾ってきてくれたドングリの中にもいるかもね」と投げかけた。その後、ドングリを帽子にはめて「この子の帽子だ!」「ゆるゆるだ」「ちょっときついな」などと楽しみながらかわる姿があった。

〈話し合ったこと〉

- ・拾ってきたドングリを幼児が見られるように置いただけでは幼児の興味を引き出しにくい。
- ・タイミングよく絵本を読んだり、遊び方を知らせたりするなどきっかけとなる環境を作ることで幼児の興味や関心が広がっていったと考える。

〈事例2〉幼児の気づきや考えを大切にしたい事例・・・2年保育4歳児3月

保育室前にクロッカスを植えた個人鉢が置いてある。登園時D児がクロッカスの開花に気づき「先生、花が咲いている」と言いに来た。D児と一緒に教師が見ていると、幼児が次々と集まってきた。「僕のはまだ咲いていない」とがっかりしているE児に「いつ咲こうかなって準備しているのよ。楽しみにしていようね」と声をかける。その後、登園時に自分の鉢を見たり水やりをしたりしている姿が見られた。

雨が降った日の朝「先生、お花が閉じている」とF児が知らせに来た。「よく気が付いたね。どうし

て閉じているのかな?」と教師が聞かけると「うーん、わかった。雨にぬれないようにだよ。だつてぬれると冷たいでしょ」と応えた。

〈話し合ったこと〉

- ・保育室前にクロッカスの鉢が置いてあることで、クロッカスの生長に気づきやすかった。
- ・幼児が気付いたことを教師が受け止めることで、周りの友達にも興味や関心が広がっていった。
- ・幼児の気づきや発見を認めながら、「どうしてだろう?」と尋ねることが、幼児なりに考えるきっかけになったと思われる。

〔分かったこと〕

- 植物の特性や栽培方法等の知識を深めるとともに、日ごろから園内外の植物を観察し、植物が生息している場所や種類、生長を把握しておくことが大切である。
- 年間を通してかかわっている植物はほとんど同じでも、年少と年長とでは、発達段階に応じて経験している内容に違いがある。(特に園内外の植物)
- 同じ植物にかかわるときでも、それぞれの幼児の発達や今までの経験を踏まえて指導を考えていく。
- 季節を逃さず、保育に取り入れるタイミングや効果的な取り入れ方を考える。
- 栽培物を育てるときには、興味を持続するよう工夫する。(目に付きやすい場に置く、水やりの時間を決める、集合時に様子を知らせる等)
- 絵本や歌などの教材を活用し、興味関心を広げたり深めたりできるようにする。
- 幼児が疑問をもったり発見したりできるような工夫をする。(比較できるものを側に置く、答えを伝えるのではなく幼児と一緒に考えたり問いかけたりする等)
- 園外保育では、いつもとは違う自然の中で興味をもてるよう、オリエンテーリングや自然物を使つての弁当作り、製作等も取り入れていく。

(3) 生き物

私たちは、幼児が生命に触れる機会として身近な生き物を保育に取り入れている。話し合いの中で、幼児の生き物へのかかわり方、生命の大切さをどう伝えていくかということが共通の問題として出された。また、教材研究として生き物をより身近に感じよう絵本や歌はないか、生き物をどう飼育したり扱ったりすればよいかということも挙げられた。

事例の中には、幼児が園庭や家の近くで見つけた虫に関するものが多く「幼児の思いや経験は大切にしたいが、命あるものを物のように遊びに使ったり安易に死なせてしまったりすることはさせたくない」という、教師の葛藤が表れているものが多かった。

また、様々な事例を検討していく中で、生き物を通して大切にしようとしているポイントが、大きく分けて3つあることが分かった。

- ①自然に対する興味・関心、驚き (!)
- ②伝えたい気持ち、共感 (☺)
- ③生き物への親しみの気持ち、愛着、命の大切さへの気づき (♥)

さらに、身近な生き物に関する情報交換を生かすものとして情報交換カレンダー (別紙) を作成し、日々の保育に活用しやすいようにまとめた。

〈事例3〉歌によってさらにダンゴムシに愛着をもった事例・・・2年保育4歳児5月

- ・園庭でダンゴムシをたくさん捕まえて喜んでいるG児。①教師が「すごいね」と声をかけると喜び、その後もダンゴムシ探しを楽しむ。片付けの際、教師が「お庭にかえしてあげたら？」と声をかけるが、そのつもりはないようで、そのままやむやみになってしまう。
- ・数日後、教師はG児の道具箱の中にダンゴムシの死骸が入ったプリンカップが入っていることに気付く。②「これじゃあダンゴムシがかわいそう。今度からは捕っても庭にかえしてあげようよ」と言うと、G児も納得する。
- ・その後、他の幼児もダンゴムシ探しを楽しむようになったため、③学級で、振り付きの『だんごむしのうた』を教えると喜んで歌う。また「お母さんダンゴムシが待ってるかもしれないから、庭に戻してあげよう」などの言葉が聞かれるようになる。

幼児が経験していること	教師の思い
!ダンゴムシを見つけたり、たくさん集めたりすることが楽しい。 !身近にいるダンゴムシの歌を歌い、より親しみをもっている。 ♥歌を歌うことで感情移入し、温かい気持ちになっている。	①自分でダンゴムシを見つけたり集めたりする楽しさを感じてほしい。 ②ダンゴムシが死んでしまったことを悲しみ、死なないようにどうすればいいか気付いてほしい。 ③ダンゴムシの歌を歌うことで親しみをもてるようにし、ダンゴムシをより身近に感じられるようにしたい。
<話し合ったこと> !この時期の幼児は、ダンゴムシを集めることが楽しい。逃がしたくない、飼いたいと思っても、興味が続かず、そのままにして死なせてしまうことも多い。幼児にとって身近な存在だからこそ、教師は機会を逃さずにダンゴムシの扱いについて考え、幼児に指導していくことが必要である。 !子どもたちが生き物を大事にしていけるように、教師は工夫して声かけをしたり、教材を使ったりしていく。特に年少には分かりやすい歌やリズムを用いていくことも効果的である。 ♥ダンゴムシは幼児にとって身近な生き物である。とすると、物のように扱ってしまう。命あるものということに気付かせていくことが大切である。	

〈事例4〉飼育することでトカゲの死に直面した事例・・・2年保育5歳児10・11月

- ・H児がトカゲを捕まえ嬉しそうに見せに来る。教師が①「トカゲは生きているものしか食べないのよね」と話すと知っており「クラスで飼いたい!」と言う。H児に②飼育ケースを渡すと、友達と一緒に葉っぱや枝を入れ、トカゲの家を作り喜ぶ。
- ・③毎日トカゲの世話をしているH児。ハエを捕まえ嬉しそうにケースへ入れるH児の姿を見て、④「かわいそう」と言う幼児もいる。
- ・天気が悪く餌を捕まえない日もあり、やがて⑤トカゲが死んでしまった。友達を誘って墓を作り園庭へ行くH児。教師も加わり桜の木の下へ埋めることにする。寒くないようにと葉っぱを敷いたり花を添えたりして「天国へ行けますように」と手を合わせるH児。⑥「このトカゲを自然の中にかえしてあげていたら、もっと長生きしたかなあ」とつぶやく教師に、H児は複雑そうな表情をしていた。

幼児が経験していること	教師の思い
!♥トカゲのことを思い、飼育ケース内に、自然と同じように葉っぱや枝を入れた家を工夫して作っている。 !♥生き餌を与えたり葉っぱを換えたりし、自分で考え大切に育てている。 😊トカゲを世話することで、友達と考えを出し合っている。 ♥大切に世話をしたトカゲが死に、かわいそうだと感じている。 !寒くないように寂しくないようにトカゲを思い、埋める場所を考えたり、花を添えたりしている。	①トカゲは飼ったことがなく、上手く飼う自信がない。 ②飼いたいというH児の思いに沿ってみよう。 ③とても大切に育てているが毎日餌が見つけれられるだろうか。 ④いろいろな感じ方の幼児がいることにも気付いてほしい。 ⑤もっと早く逃がした方がよかったのではないかな。 ⑥今の気持ちや経験を次につなげたい。

<話し合ったこと>

- !葉っぱや枝を入れてトカゲの家を作るH児の姿は、年少時に様々な生き物に触れて、扱い方が分かってきている年長児ならではの姿である。年少時にどんな経験をするかが大きくかわる。
- 😊周りの幼児もトカゲの世話をしているH児の姿から、生き餌しか食べない生き物もいることや、いろいろな感じ方があるということを知るきっかけとなっている。
- ♥トカゲを飼ったことで、生き餌を与え続ける難しさや、大切に世話をしても死んでしまった悲しさを感じ、命の大切さを感じられたのではないかな。

【分かったこと】

- 保育に身近な生き物を取り入れる際、幼児の興味・関心を引き出すこと、友達同士の伝え合いや共感につながっていくこと、生き物への親しみの気持ちや命の大切さに気付くようにしていくことが大切である。
- 生き物に直接触れたり飼ってみたりすることで気付くことは多い。幼児が十分に生き物に触れる機会をつくる必要がある。その際、教師の感性や価値観が影響しやすいことを十分に考慮して援助することが大切である。
- 生き物に親しみを感じたり命の大切さを感じたりするきっかけとして、生き物の登場する物語や歌を楽しむことが有効であるため、教材をタイミングよく活用することが大切である。

4. まとめと今後の課題

3つのグループに分かれて2年間、それぞれのグループごとに事例検討や教材研究、情報交換などを行うことにより、次のことが分かった。

- ・自然には幼児が心を揺さぶられるような魅力があると同時に、自分の思い通りにならないもどかさや不思議さがある。幼児の「不思議だな」「どうしてだろう」という気持ちに寄り添いながらも、あまり多くの答えを出さず、共感していくことが幼児自ら知りたいと思う探究心を育てる。
- ・動植物に触れ、親しみをもったり、自分で世話をしたりする体験が、幼児に生命の大切さを知らせることにつながる。また、生き物の生死に直面した時どう対応すべきか答えはない。そのためには、教師自身が自然に親しむ機会を多くもち、感性や価値観を磨くことが大切である。
- ・自然体験には、初めからねらいをもって活動する時と偶然に出会う時がある。偶然に出会った時、幼児が自然と向き合えるようにタイミングを逃さずいかに効果的に保育に取り入れるかは、その教師の感性や教材研究にかかっている。日ごろから教師が自然に対して敏感なアンテナをもち、教材研究をすることが大切である。
- ・幼児が自然への興味・関心・親しみを深め、自然をより身近に感じられるように、絵本、図鑑、話、歌、リズム遊び等の教材を活用することが大切である。

今後は、この2年間で分かったことを基に、時期や幼児の発見に応じた環境をタイミングよく取り入れていく。その中で幼児が試したり、考えたり、友達とかかわったりしながら、さらに自然に対する興味を広げられるように援助していきたい。そして教師自身が探求心をもちながら自然に対する興味を広げ、幼児に共感する気持ちをもち続けたいと考えている。

# 「人とかかわる力が育つ過程を明らかにする」 ～幼児の育ちを支える教師の援助のあり方を中心に～

## 1. テーマ設定の理由

私たちの部会では人とかかわる力を「人と一緒に生活することを楽しめる力、互いに支えあっていくことのできる力」ととらえた。社会生活を営んでいくためには人とかかわる力が必要であるが、今、人とかかわる力が育ちにくいといわれている。その背景には、核家族化、少子化等の影響があると考えられ、互いに干渉し合わない、本音で話さない、特定の間人間関係に固執する等の姿も見られる。

幼児も、幼稚園という社会生活が始まると、様々な人とかかわるようになり、心を通わせる楽しさを感じたり友達に思いが伝わらない、意見がぶつかる等の葛藤体験をしたりするようになる。つまり、幼稚園生活が幼児にとって望ましい人とのかかわり方を学ぶスタート地点になっていると言える。

私たちは「人とかかわることが楽しい!」と感じられる幼児の育成を目指して、幼児が幼稚園生活の中で様々な人や環境にかかわりながら、自分の思いを出したり、相手を受け入れたりすることができるように日々指導を積み重ねている。

人とかかわる力が育つ過程やその時期に応じた援助を明らかにし、見通しをもって指導を積み重ねていけるように、また、幼稚園で育てていることをわかりやすく表したいと考え、人とのかかわりに視点をあてた指導計画の作成に取り組むことにした。また、人とのかかわりがうまくいかずに戸惑いを感じている幼児をどのように理解し、援助していけばよいのかにも視点をあて、研究を進めていくことにした。

## 2. 研究経過

◎人とかかわる力が育つ過程を明らかにするために、2グループに分かれ、事例を持ち寄り、分析、考察を行う。

A グループ「実態や事例をもとに、わかりやすい指導計画を作る～2年保育年少児を中心に～」

B グループ「人とのかかわりがうまくいかない幼児に視点をあて、援助や発達の道筋を継続的に探る～2年保育年長児を中心に～」

◎講師の先生より指導、助言を受ける。

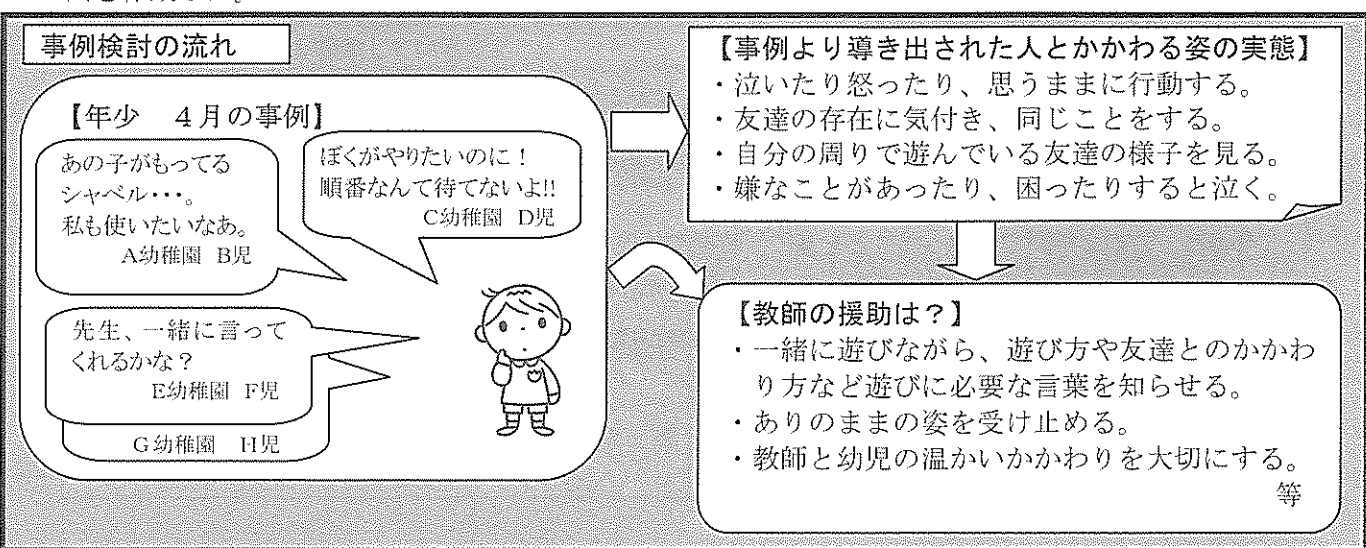
平成 18年 11月 15日 現 特別区人事・厚生事務組合教育委員会事務局 副参事 渡邊 郁美先生  
平成 19年 7月 12日 桜美林大学健康福祉学群 教授 井上千枝美先生

## 3. 研究内容

Aグループ「実態や事例をもとに、わかりやすい指導計画を作る～2年保育年少児を中心に～」

### (1) 分かりやすい指導計画を目指して

保育経験を重ねていくと、経験や感覚で幼児の発達をおおまかに見通すことが出来るようになる。しかし、それを裏付ける資料がなければ、保護者に理解を求めて協力してもらうことは難しい。私たちは自分たちの実践事例をもとに、幼児の姿や教師の援助が具体的に記されているわかりやすい指導計画を作成することにした。区内7園の事例を持ち寄り、時期毎に下図のような検討を重ね、P. 23の指導計画を作成した。



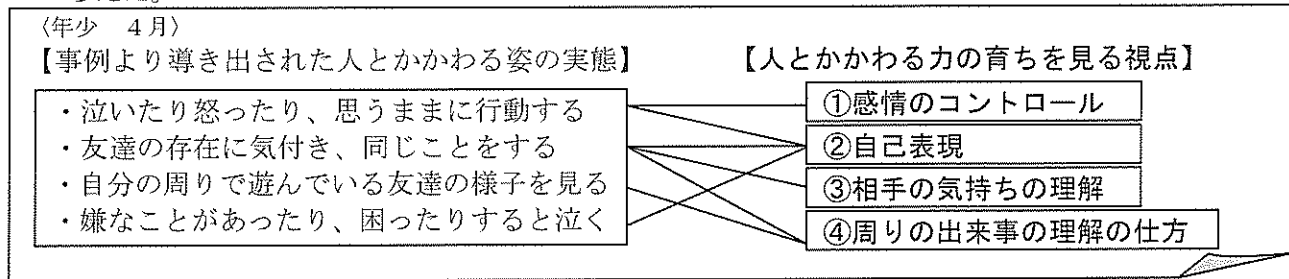
## 年少4歳児 人とのかかわりの指導計画

月	4月	5月	6月	7月	9月～12月	1月～3月	
人とのかかわる対象	よく知っている物 入園前から知っている友達 信頼できる教師	目新しい物 同じものを持った友達 同じ場の友達	好きな友達 への思いが大きくなる時期	好きな友達と一緒遊びたい 思いが強い時期	好きな友達と一緒遊んだ 思いが強まる時期	気の合う友達 学級の友達	
援助のポイント	教師が振り所なり、人とのかかわり方を知っていく時期 ・不安がいっぱい。 ・友達にもどうかかわったらいかがいかわからない。 ・でも、教師に受け止めてもらおうと安心して。	友達の目が向く始めるが、一方的なかわり方が多い時期 ・興味を惹きたくなくて叫ぶ。 ・思い通りにならないから嫌。 ・嫌なことがあったり、困ったりすると泣く。	好きな友達と遊ぶ時間を楽しめる時期 ・好きな遊びの時間を充実し、好きな友達と遊ぶ中で、相手を泣かせた経験を通して、相手の気持ちに気をつけるようになる。	好きな友達と遊ぶ時間を楽しめる時期 ・好きな遊びの時間を充実し、好きな友達と遊ぶ中で、相手を泣かせた経験を通して、相手の気持ちに気をつけるようになる。	好きな友達と遊ぶ時間を楽しめる時期 ・好きな遊びの時間を充実し、好きな友達と遊ぶ中で、相手を泣かせた経験を通して、相手の気持ちに気をつけるようになる。	自分の思いが相手に伝わるという経験が、積み重なるようになる時期 ・自分の思いを我慢しないで出す姿を認める。 ・言葉が足りないときは、教師が補う。	自分の思いが相手に伝わるという経験が、積み重なるようになる時期 ・自分の思いが伝わり合ったり、気持の立て直しや、いろいろな解決方法があることを感じ取らせる。 ・時間をかけて、自分で気持ちを立て直すのを見守る。 ・解決に向けて教師も一緒に考え、自分たちで解決していくようにする。
人とのかかわりを促す環境構成や活動のポイント	安心して遊べるように ・家庭で親しんでいるような遊具を用意。(ままごと、ブロック、お絵描き、粘土 等)	友達がたまたま遊べるように ・ごさ、ウレタン積木、サークル等	イメージしやすい仲間意識がもてるような物 ・お面、マント、剣、ヘアバンド、スカート等	友達の動きを楽しみながら、友達とかわられる遊び ・お家ごっこ、売り買いごっこ、病院ごっこ、電車ごっこ等	友達と場作りが楽しめるような物 ・複数人数が入れるダンボール、中型積木等	力関係に関係なく楽しめるよう、勝敗の偶然性が高い遊び ・王様ジャンケン、どんじやんけん等のジャンケンゲーム等	いろいろな友達と遊ぶ楽しさを味わえるルールのある遊び ・円形ドッジ、引越鬼、助け鬼等
共通のイメージをもって遊べるように	学級の中で安定し、集まる楽しさを感じられるように ・簡単な歌や手遊び、幼児が知っている内容の絵本、紙芝居等	友達と一緒触れ合って遊ぶ楽しさを味わえるように (あぶくたつた、むつくりくまさん、かごめかごめ、イチゴミルク、カミナリゲーム 等)	友達と一緒触れ合って遊ぶ楽しさを味わえるように (あぶくたつた、むつくりくまさん、かごめかごめ、イチゴミルク、カミナリゲーム 等)	友達と一緒触れ合って遊ぶ楽しさを味わえるように (あぶくたつた、むつくりくまさん、かごめかごめ、イチゴミルク、カミナリゲーム 等)	友達と一緒触れ合って遊ぶ楽しさを味わえるように (あぶくたつた、むつくりくまさん、かごめかごめ、イチゴミルク、カミナリゲーム 等)	友達と一緒触れ合って遊ぶ楽しさを味わえるように (あぶくたつた、むつくりくまさん、かごめかごめ、イチゴミルク、カミナリゲーム 等)	



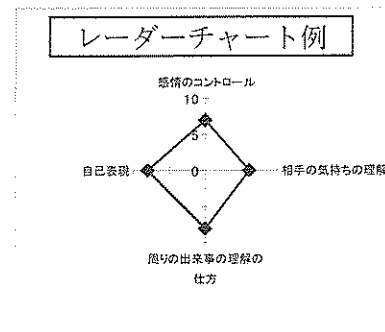
(2) 人とかかわる力の育ちを見る視点について

指導計画の作成で事例を検討していくうちに、幼児が人とかかわる姿の実態には下記のような4つの視点があることが分かった。私たちは、この視点を【人とかかわる力の育ちを見る視点】ととらえた。



(3) 人とかかわる力 チェックシート

上記の【人とかかわる力の育ちを見る視点】を使って幼児の実態を見ると、人とのかかわりにおいてどのような育ちをしているのか、どの部分に力を入れて指導したらよいかはつきりすることが分かった。そこで、幼児の姿を客観的にとらえるために、【人とかかわる力の育ちを見る視点】を項目毎に10段階に分け、下表のような《人とかかわる力 チェックシート》を作成した。さらに、幼児の成長した面や課題を視覚的にとらえていけるように、レーダーチャート(右図)にあてはめて活用することにした。



人とかかわる力 チェックシート			
<感情のコントロール>	<相手の気持ちの理解>	<周りの出来事理解の仕方>	<自己表現>
1 すぐに泣いたり怒ったりする 思うままに行動する	1 他者の存在の認識が薄い または他者に気付かない	1 周りの出来事には気付かない	1 自分の気持ちを感情のままに表現する(泣く、怒る、物を投げる等)または 表し方がわからない
2 泣いたり怒ったりするが教師に聞いてもらったり慰められたりして、気持ちが落ち着くこともある	2 他者の存在には気付くが言葉や様子には気が付かない	2 自分の周りで起きていることに気付く	2 生理的欲求や最低限の言葉で自分の気持ちを表現することができる(ダメ、いいよ、のどが渇いた等)
3 不安になることがあっても教師に受け止められることで自分なりに立ち直ろうとする	3 教師の仲介があれば、相手の言葉、様子に気付くことができる	3 自分の周りで起きていることが分かり、友達や教師に伝える	3 友達の言葉や動きをまねることを楽しむ
4 教師の動きや、受容があれば我慢することができる	4 仲のよい友達、かかわりの多い幼児の気持ちを受け止められる	4 自分の周りで起きていることが分かり、教師の援助があれば自分のできることをする	4 教師の援助があれば自分の気持ちや思いを言葉で表現することができる
5 状況によっては 言われなくても我慢したり、気持ちを切り替えたりすることができる	5 仲のよい友達、かかわりの多い幼児でなくても、教師の仲介があれば受け止められる	5 自分の周りで起きていることが分かり、友達の動きを見たり友達に促されたりして自分なりの判断で行動する	5 友達に言葉で自分の気持ちや思いを表わすことができる
6 自分なりに我慢したり 気持ちを切り替えたりする機会が増えてくる	6 仲のよい友達、かかわりの多い幼児でなくても、受け止められる	6 自分の周りで起きていることが分かり、自分なりによいと思っ行動するが、状況に適さないこともある	6 いろいろな友達に言葉で自分の気持ちや思いを表わすことができる
7 自分ひとりで、時間はかかるが気持ちをコントロールすることができる	7 いろいろな友達に対して、気持ちを受け止め、自分のこととして考えることができる	7 自分の周りで起きていることが分かり、教師の援助があれば状況を考えたり、友達の気持ちを想像したりして動く	7 友達とやりとりする中で自分の気持ちや思いを言葉で表わすことができる
8 自分なりに気持ちを切り替えられるが、不得手なことや好きでないことに対しては、慎重になったり不安になったりする	8 いろいろな友達に対して、気持ちを受け止め、理解し、考えることができる	8 自分の周りで起きていることが分かり、状況を考えたり、友達の気持ちを想像したりして動く	8 自分の気持ちや思い、状況等を相手に分かるように話すことができる
9 状況に応じて気持ちを切り替えたり 我慢したりすることができるようになる	9 仲のよい友達、かかわりの多い幼児の気持ちを理解したり、自分の都合の悪いことでも受け止め、考えたりすることができる	9 自分の周りで起きていることが分かり、状況に応じた行動をする	9 言葉によるやりとりを楽しむ
10 状況に応じて、自分の気持ちをコントロールできる	10 いろいろな友達の気持ちを、察して理解したり、自分に都合の悪いことでも、受け止め、考えたりすることができる	10 自分の周りで起きていることが分かり自らすすんで状況に応じた行動をする	10 自分で考えて周囲に働きかけることや場や状況に応じた表現の仕方ができる(泣いている友達に声をかける、声の大きさ、言葉遣い等)

※1は入園期、10は修了期ととらえ、2~9に関してはそれぞれの項目で時期に幅が見られるため、明記をしない。

(4) 考察・活用事例

指導計画を作成したことで、人とのかかわり方がどのように育っていくか、援助のポイントは何かが明らかになった。年長になって、友達と協力したり、グループで協力的な活動ができるようになったりするためには、年少時の過ごし方が重要であることも見えてきた。自分を受け入れてくれる教師の存在を基盤として、自分の気持ちを出せるようになる・友達と一緒に遊ぶと楽しいという気持ちを感じられる・友達には自分と違う気持ちがあることに気付く・学級のみんなで一緒に遊ぶ楽しさを味わえる等の経験ができるように援助していくことが大切だとわかった。また、その時期の特徴(同じ場で過ごすことが楽しい、好きな友達への思いが強くなる等)をとらえ、十分に楽しめるようにしていくことが、次の段階に移行できる上で大切になってくる。

しかし、幼児には発達の上での個人差があり、指導計画の時期にあてはまるとは限らない。指導計画を念頭におきながらも、その幼児に合った柔軟な援助をしていくことが重要である。そのような場合に、幼児の実態をとらえなおし、援助の方向を探ることが必要となってくる。

そこで、下記の事例を本研究の《人とかかわる力 チェックシート》にあてはめて、援助に悩んでいた幼児の実態をとらえなおし、「人とのかかわりの指導計画」で援助の方向を探った事例を下図に示す。

<年少組10月~12月の事例>

10月頃のA児の姿

- ・A児はいつも仲良しの友達2人と一緒に遊んでいるが、その友達が遊びをリードしており、A児は言われたことに従うことが多かった。
- ・自分の気持ちを言葉で伝えることができにくく、遊びを十分に楽しんでいるように思われた。

一教師は援助に悩む。

人とのかかわりの指導計画で入園当初の教師の援助のポイントを見てみると…

- ①ありのままの姿を受け止める。
- ②一緒に遊びながら友達とのかかわり方を知らせる。(遊びに必要な言葉など)
- ③自分の気持ちを表し方を知らせる。

援助のポイントを実践

そこでA児を人とかかわる力 チェックシートにあてはめてみると…

年少10月

☆自己表現をする力が弱く、入園当初によく見られる姿に近いことに気付いた。

再び、人とかかわる力 チェックシートにあてはめてみると…

年少12月 年少10月

☆自己表現の項目や感情のコントロールの項目で変容が見られた。(人とかかわる力が育った)

このように、《人とかかわる力 チェックシート》を活用し、その幼児の実態を丁寧にとらえなおしたことで、「今、この幼児にはどんな援助が必要なのか」「どんな力を伸ばすことが必要なのか」ということが明らかになった。そして、ポイントをおさえて援助していったことで発達をよりよく促すことができた。

Bグループ「人とのかかわりがうまくいかない幼児に視点をあて、援助や発達の道筋を継続的に探る ~2年保育年長児を中心に~」

(1) 戸惑いを感じている幼児をより理解するために

年長児になると個々に友達関係の広がりや深まりが見えてくる。気の合った友達との遊びや目あてに向かったのグループ活動など、数人がかかわっている姿が見えてくる中、人とかかわりがうまくいかず孤立したり、トラブルになったりする幼児の姿が目立ち、担任それぞれが悩んでいた。そこで、以下の表のように視点を定め、「周囲の友達とのかかわり」「周囲の子がどう感じているか」等も含め、各自が事例を持ち寄り、実態を分析した。

特徴的な行動と周囲の幼児	行動理解	この時期望んでいる姿	援助(環境)	人とかかわりの中で経験していること

(2) 事例

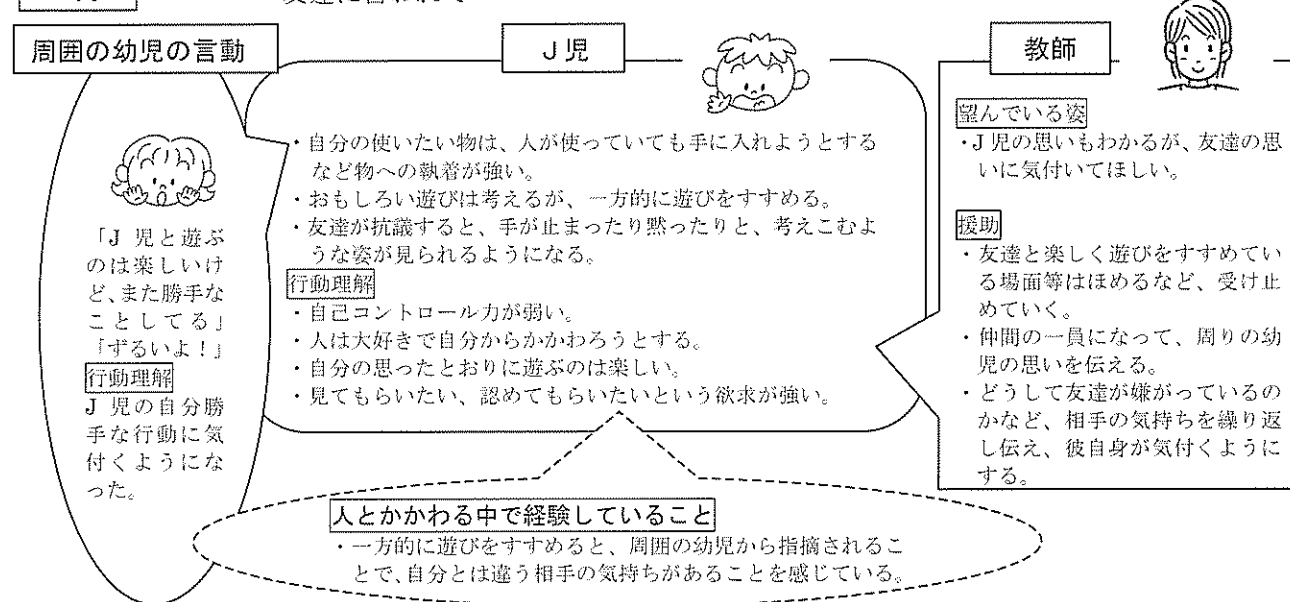
様々な事例を話し合う中で、一人の幼児の具体的な事例を継続して追うことで、人とかかわりについての幼児の変容を探り、指導の手立てを考えていった。その結果、幼児の育ちや時期に応じた人とかかわるための経験を洗い出すことができた。

その一例を図式にした。

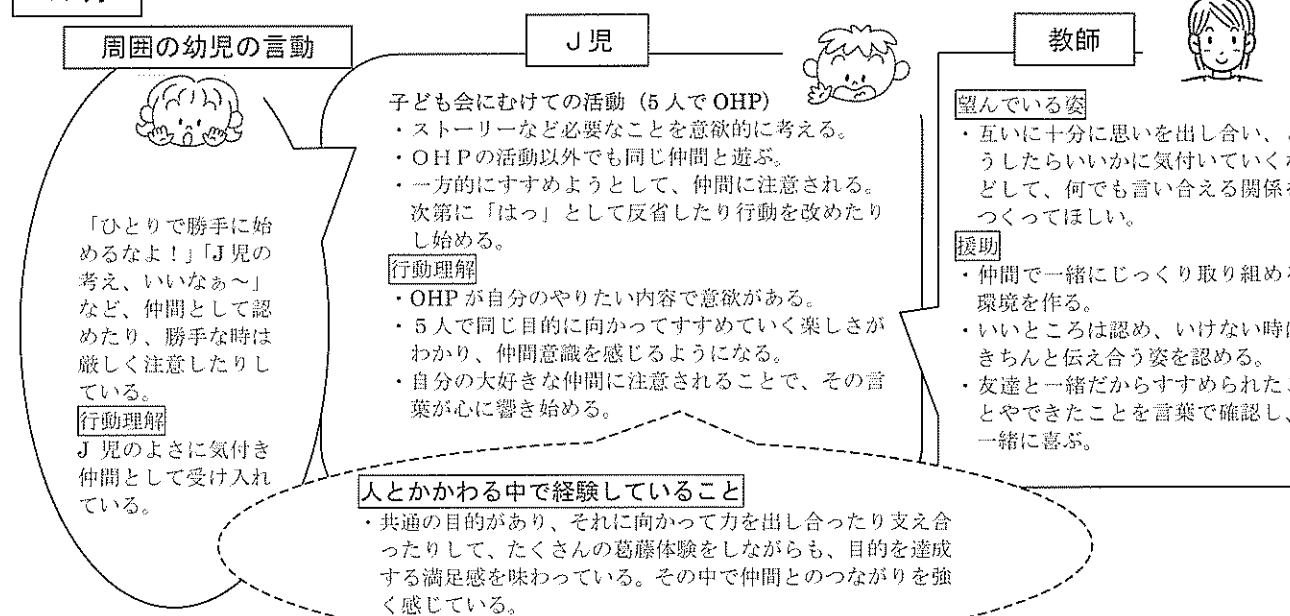
(ア) 『自分の思い通りに遊びをすすめる、一方的に主張する傾向にあるJ児』 年長 5歳児

年少時には、自分のやりたい遊びを十分楽しみ、友達とスムーズにかかわっているように見受けられたが、年長になり一方的に主張する姿が目立ち、相互関係がづくりにくいところが見えてきた。

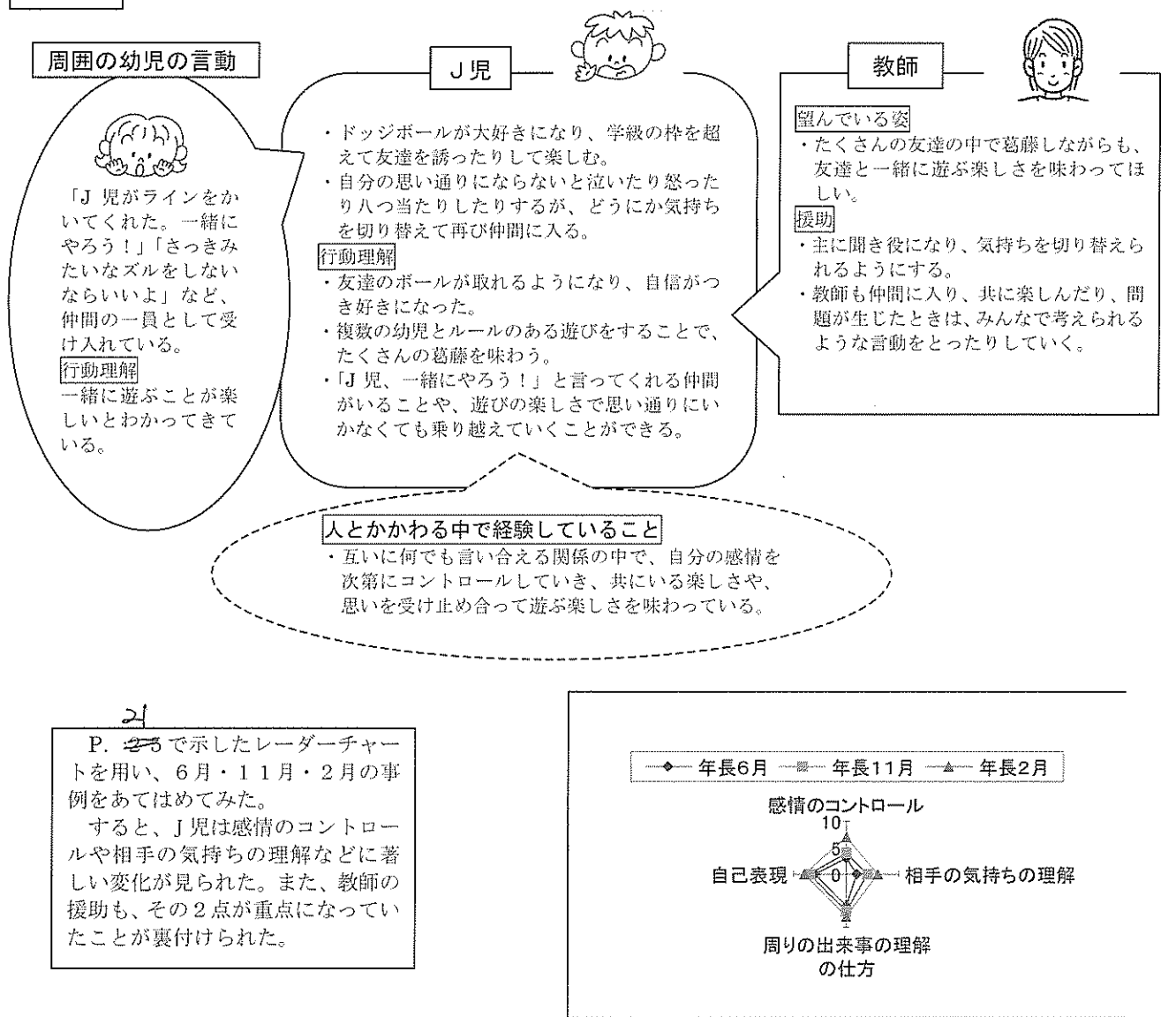
6月 ……友達に言われて……



11月 ……仲間との中で「はっ」とする……



2月 ……大好きなドッジボールで気持ちの切り替えの経験を……



(イ) 考察

11月の事例では、J児が自分のやりたいことを仲間とかかわりながらすすめていく中で、互いが思いを出し合い、注意されたり認められたりした。そのことがきっかけとなり、人と心地よくかかわる経験ができた。

その後も、発達に合わせ、友達に思いを伝えたり、自分の気持ちをコントロールしたりするよう援助を繰り返し行ってきた。教師がJ児と周囲の幼児とのかかわりの仲介役となったことで、J児の心に友達の言葉が響き、仲間が大切な存在になっていったと考える。

(3) まとめ

年長児になると、個への援助とともに、周囲の幼児との育ち合いを深めていくことが大切である。以下に指導のポイントを示す。

- ・ 幼児の思いや欲求などありのままをとらえ、思いを認めるとともに、周囲の幼児の思いを伝え、気付かせる。
- ・ 力関係をていねいに見ていきながら、互いに何でも言い合える関係作りをする。
- ・ 互いの思いや力を発揮し合い、じっくりと遊びに取り組めるよう場や時間を保障するなど環境を整えていく。

さらに思いを受け止める、認める、仲間になる、共感するなど、教師の存在が人とかかわる力を育てるための重要な役割を果たすことを再確認した。また、一つの事例を継続的に見ていくことで、人とかかわる力が育つ時には、きっかけや状況などがあることに気付いた。そして、その時期に適切な援助をすることで、人とかかわる力が培われると考える。

#### 4. まとめと今後の課題

私たちは、幼児の人とかかわる力が育つ過程を、年少時の指導計画の作成、《人とかかわる力 チェックシート》やレーダーチャートの作成、具体的な事例検討など、様々な方法で探ってきた。その中で、わかったことは以下の3点である。

- ・年少の時期は、人とかかわりにおいて大切な出会いの時期であり、ここでしっかりと教師との信頼関係を築き、友達との遊びの楽しさを知らせていくことが大事である。
- ・一人一人の実態を客観的にとらえ、丁寧に見ていくことで、人とかかわる力が育つきっかけや状況が見えてくる。
- ・人とかかわる力を育てていく根底を支えるのは教師自身である。

さらに、研究をすすめていく中で、人とかかわる力を育てる上での具体的な指導のポイントとして、以下の点をあらためて認識することができた。

- ・その子らしさを大切に丸ごと受け止めることが、人とかかわる力を育てる基本である。
- ・人とかかわる力は、幼児自身が経験の積み重ねで獲得していく。そのために、教師は様々な出会いをコーディネートし、幼児同士のネットワークをつくる援助をしていく。
- ・幼児同士、相手との違いを認め合える、肯定的な関係をつくっていく。
- ・協同性の育ちと自己の育ちの両面を見ていくことが必要である。

幼稚園教育要領に、“教師との信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが、人とかかわることの基盤になる”とある。今後は、この研究で得たことを日々の保育の中で活用し、教師との信頼関係を基に、幼児の人とかかわる力を育てるための援助をさらに深め、人とかかわる喜びを心から味わうことのできる幼児の育成に努力していきたい。

#### 第4部会

### 「幼児期からの学び」～指導の工夫と発信～

#### 1 主題設定の理由

幼稚園教育は遊びを通して総合的に指導していくものであり、遊びが学びの基盤になっている。私たちは日々の保育の中で幼児に遊びを通して学ぶ意欲を育てている。

私たち幼稚園教育に携わる者は、より一層の指導力を身につけ幼児の遊びや学びを充実させ、そのことを保護者に伝えていくことが求められている。「幼稚園における遊びを通しての学び」を保護者や地域に発信していき、幼児期には遊びが学びであることを理解してもらうことも幼稚園としての重要な役割であると考えている。しかし、このことを明確に伝えることは難しく、課題ともなっている。

これらのことから、幼稚園での遊びから得られる学びを明らかにし、そのための指導の工夫と発信の方法を探りたいと考え、テーマを設定した。

#### 2 研究経過

<18年度>・各自が研究したい「学び」の事例から研究内容や進め方について話し合う。

- ・2グループに分かれて検討する。

Aグループ「具体的な遊びから学びを探る」

Bグループ「期でおさえて学びを探る」

- ・講演会 講師 井上千枝美先生（桜美林大学教授）

「幼児期からの学び」

<19年度>

- ・引き続き2グループに分かれ、「幼稚園での学び」と「学びの発信」について検討する。

- ・講演会 講師 木暮義弘先生（元中央区立泰明幼稚園園長）

（現東京都教職員研修センター研修部授業力向上課研修指導員）

「幼児期からの学び ー指導の工夫と発信ー」

- ・研究集録、研究発表について検討する。

#### 3 研究内容

幼児が幼稚園生活で学んでいることは何かを明確にとらえ、分かりやすく保護者や地域などに伝えていけるように研究を進めてきた。その中で、何を学んでいるのか、幼稚園教育要領の5つの領域に照らし合わせて確認し援助の方法を考え、発信の工夫を探っていった。その際、Aグループでは特に「援助の工夫と発信の工夫について」に視点を置き、Bグループでは「幼児の学びや幼稚園ならではの環境」に視点をあてた。

(1) Aグループでは、砂遊びや虫探しなど何気ない日常的な幼児の遊びの場面から、幼児がどんな学びをしているのか、学びを豊かにするための援助の工夫と、幼稚園での学びを保護者へ分かりやすく発信するための工夫の仕方を探っていった。